



ポルトガルという国

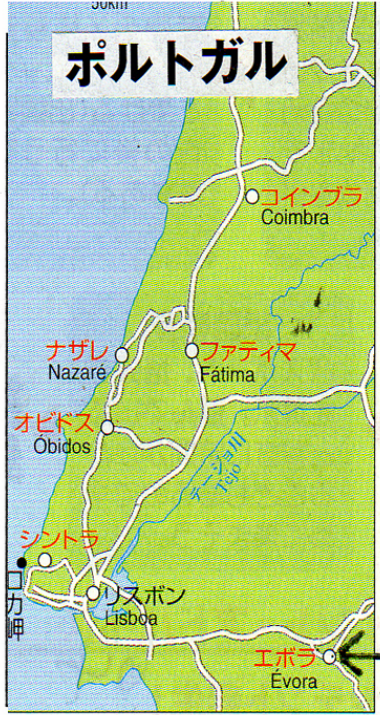
スペイン巡礼を終わり、今回からポルトガルに入る。
 昨年は北スペイン西端の聖地コンポステイ

ラからポルトガル第二の都市、ポルトに入った。今年には南スペインのセビリヤから首都リスボンの東百五十キロ、

学都エボラに入った。ポルトガルは実に興味深い歴史を持った国であり、まずその歴史に触れておきたい。今でこそ日本の領土の約四分の一の小国だが、古代ローマ時代か

ら歴史をもち、十五世紀末から十六世紀にかけてはスペインとも世界を二分した国である。

西北端からポルトガル入り



ポルトガルと日本との出会い

は、一五四三年、種子島にポルトガル人が漂着したことに始まる。というより、この事件はヨーロッパ世界にとって「日本発見」という意味を持つ。

にもかかわらず、日本はスペイン、ポルトガルのことを「南蛮」と表現したのだから、失礼と言おうか「知らぬ」とは恐ろしいことだ。

ポルトガル人より少し遅れて来日したオランダ人のことを「紅毛(こうもう)」と言ったのも、同じような語感と思うのは私だけではない。

さて、一四九二年、スペインのイサベル女王援助のもとコロンブスは新大陸を発見した。これよりあとスペイン、ポルトガルの植民地競争は激化する。

両国ともカトリック国。そこでローマ法王が仲介し、二年後の一四九四年「トルデシリヤス条約」が結ばれた。一口に言えば、ヨーロッパを除く世界をスペインとポルトガルに二分したのである。

その分岐線は西経四十度。この縦線の東側がポルトガル、西側がスペインと住み分けして植民地化を進めたのだ。

そのため西経四十度より西側になる中米、南米のほとんどが今もスペイン語圏にある。ところが、ブラジルだけはポルトガル語圏である。

地図を見るとよくわかるが、ブラジルの東側に突き出した部分が西経四十度線を東に越えている。ポルトガルはそのことを口実として、条約に反して四十九度を越えて西へ西へと進出し、現在の広大な

ブラジルを植民地化したのだ。二〇〇二年、ポルトガルの最後の植民地、東ティモールが独立し、植民地はゼロとなったが、友人のブラジル人はポルトガル語を話す。過去の歴史の上に生きているのだと実感する。

ポルトガルは、リスボン(リスボンの「発見モニュメント」にあるサビエルの像(中央))

「オヤ？」と思ったが、彼はポルトガル国王の命令によって東洋に向かったのだ。ポルトガル発見モニュメントの中にいて当然なのである。

同じ半島に住み、同じカトリック教徒であるスペインとポルトガル。一五八〇年から一時、スペインと併合されたこともあるが、違いを強調するためでもなろうが、両国の間には一時間の時差があるのも面白い。

(元山口放送取締役ラジオ局長)



リスボンの「発見モニュメント」にあるサビエルの像(中央)